

## 作物被害

### 2万6293ヘクタール、農地1400カ所

【札幌】道農政部は27日、8月の台風による農業被害をまとめた。十勝の被害額は299億8400万円に拡大。道内全体の被害額は542億9300万円に達し、1981年の「56水害」の645億円に次ぐ被害規模となった。

十勝の農作物被害は18市町村で2万6293ヘクタールに及び、被害額は184億2200万円に上った。家畜の水死や生乳廃棄などで11億2200万円、共同放牧やシカ侵入防止

の柵破損などの共同施設関係は9カ所、1億7000万円。農地の土砂堆積や耕土流出、農道の損傷などは1400カ所、102億7000万円。

道内全体のうち農作物の被害面積は3万8927ヘクタール、被害額は262億6900万円。このうち十勝は約7割を占め、被害の大きさが改めて浮き彫りになった。

被害額が拡大したのは、十勝の畑の中で水に漬かり腐ったジャガイモが多数見つかったことや、農地被害が拡大したほか、農業用施設の損壊や農業機械の被害が新たに追加されたため。

## 台風で自給飼料の供給悪化

2016年10月21日

管内の酪農・畜産農家が、8月の台風などによる自給のえさ不足や品質の低下に不安を抱えている。飼料用トウモロコシや牧草は、倒伏や大雨で収穫時期が遅れて、質、量ともに平年を下回る見込み。えさの出来は生乳生産や今後の繁殖の成否も左右するため、関係者は影響を懸念し、対策を急いでいる。



自給飼料の質と収量の低下で生乳生産、繁殖への影響が懸念されている

「牧草とデントコーン（飼料用トウモロコシ）の収量は例年の7割ぐらい。高くても輸入の飼料に頼らなくてはいけないかもしれない」

新得町内で子牛を含めて950頭を飼育する北広牧場の若杉政敏代表（59）は、今年の自給飼料の見込みを語る。牧草は150ヘクタール、飼料用トウモロコシは90ヘクタールで育てるが、冠水や収穫適期に刈り取れなかった畑があった。「酪農家の基本はえさ。えさの品質は牛の健康に影響し、乳量にもつながる」と来年に向けての不安を口にした。

飼料用トウモロコシを発酵させたコーンサイレージは、夏場で食欲が落ちる牛も好んで食べる飼料として使われる。牧草もサイレージや乾草などで重要な粗飼料となっている。

しかし、飼料用トウモロコシは夏の天候不順で生育が遅れた上、台風による倒伏、大雨で畑に機械が入れなかった。牧草も8月から9月にかけて、「2番牧草」収穫期の長雨で適期を逃した。地域差はあるものの飼料用トウモロコシの収量は例年の6～8割程度。牧草は、収量はあっても、必要な栄養価は少なくなった。

### 乳量や繁殖影響懸念

えさの品質の低下は牛の体調に影響し、乳牛では乳量の減少につながる。音更町の酪農家（35）も「体調を崩すと牛が妊娠しにくくなる」と語り、繁殖への影響、乳量減という悪循環を懸念した。

今回の台風では畑作を中心に大きな被害が報告されているが、酪農・畜産も今年産の飼料を使いだす年末から来年にかけて、影響が広がるとみられる。国も支援対策の1つに粗飼料の購入経費の助成を盛り込んだ。

十勝農協連では「来年の夏にかけてコーンサイレージは絶対量が不足する可能性がある。今からできる準備や対策を考えたい」（酪農畜産課）としている。